

ラフカディオ・ハーン著「神国日本—解明への一試論」東洋文庫 292、平凡社 1976年7月14日刊を読む

1. (1)それはとにかく、日本の外見上の不思議さには、結局美しさが充ち溢れていることがわかるのだが、それと同様その内面的な不思議さの中にも、それ自体の美しさがあるように思われる。
(2)それは、庶民の日常生活面に反映している道徳的な美しさなのである。
(3)こうした庶民生活の魅力に富む部分は、尋常な、通り一遍の人たちの目には、幾代もかかって積み上げられて心理学的に特異化されたものとして映るわけではないが、パーシバル・ローエルのような学究的な人になってくると、提示されているこの問題性にすぐに目がつくのである。
(4)天分のこれには及ばない外国人になると、天性同感同情的であるとしても、それを快く思いながらも扱いに窮し、結局彼らを魅了したこの社会状態をば、世界の向う側での彼ら自身の幸福な生活の経験に照らして説明しようとするのである。
2. (1)ここで、こうした外国人が好機に恵まれて、半年か一年、日本内地のどこか古風な町に住んだと考えるみよう。
(2)その滞在のそもそものはじめから、彼の周囲に生活している人たちが、如何にも親切で楽しそうな様子に深い印象をうけずにはおれまい。
(3)そしてその人たちはお互い同士の間でも、また同様に彼との間でも、よそであったら絶対信頼の間柄にだけ見られるような、不断の機嫌よさ、人をそらさぬ如才なさや気立てのよさを見せてくれるのがわかるだろう。
(4)だれもかれもが、お互いに合わせそうな顔をして楽しそうな言葉で挨拶をしあっている。ここに顔をはなすことがない。
(5)毎日の生活の中のごくありふれた、あたりまえの出来事が、別に教え込まれているのでもないのに、心からそのまま自然な流露と思われるほどに無技巧でしかも非のないような対応で、全く変わったものにされてしまう。
(6)いつ、どんな場合でも、そとに表われる快活さだけは決してなくなるらない。
(7)つまり、どんな災難が——暴風雨や火災、洪水や地震があっても、挨拶し合う笑い声、明るい笑顔に丁寧な会釈、心からの慰問にお互を喜ばせたいという気持などが、いつも人の世を楽しいものにしようとしている。
(8)宗教も、この日の光のような明るさの中では、暗い影をもち込まない。
(9)そこで、神さまや仏さまの前で人々はお祈りを捧げながらもにこやかである。
(10)寺院の境内は子どもたちの遊び場であり、大きな氏神の社殿のある境内——荘厳な場所なのだ——には、踊りの屋台がつくられたりする。
(11)家庭の生活は、どこでも安穏を旨としているらしい。
(12)それだから表立って喧嘩などもないし、怒鳴ったりの罵声もなし、泣くこともなければ

叱言もきかれない。

(13) 虐待は、家畜に対してでも、見られないようで、町に出てくる百姓さんが自分の牛や馬に根気よく寄り添っててくてく歩く、そしてこの口のきけない相手の荷物運搬を手伝い、鞭や突き棒などは使わないのである。

(14) 荷馬車の御者すなわち手綱とりの馬方は、ずいぶん腹の立つような時でも、横着な犬や阿呆なニワトリなどを轢かないように、これを避けてとおってゆく。

(15) …相当に長い年月の間、こうした環境の中で暮らしていて、生活の楽しさを損ねるようなことにはぶつつからずにすむのである。

3. (1) もちろんいまわたくしが述べたような世情は、現在ではうつり変わってきている。

(2) しかしそれでも遠隔の地方などにゆけば、いまだに見られる。

(3) 何百年もの間、盗難事件などの一度もあつたことのない地方にわたくしは住居した経験をもつてもある。

(4) ——そこでは明治になって新しく刑務所を造ったところが、いつもがら空きで用がなかった——そこではまた住民は夜も昼も戸締まりをしなかった。

(5) こんなことはどの日本人にも耳新しいことではない。

(6) そうした地方で、外国人としてのみなさんに親切を見せられたとしたら、お役所の通達の結果と思ひもするだろう。

(7) しかしそれにしても人々お互同士の間善意を、どう説明すればよいのだろう。

(8) 荒っぽさも、乱暴も、また不正直もなく、法を犯すものもなく、その上このような社会状態が、何世紀の間、同じように存続してきたとわかったら、ずいぶん道徳的にすぐれた人間の世界にはいり込んだと思いたくなるだろう。

(9) すべてこうしたもの静かな上品さ、純真無垢の正直さ、誠意の溢れる言動を、誰もが、当然心のとことんまでの善良さからくる行動と解釈することだろう。

(10) そして人に喜びを与えるこの素朴さは、決して野蛮からくる素朴さではない。

(11) ここでは誰もがみな教育を受けている。

(12) 誰もがみごとな書き方や話し方を心得ている。

(13) 詩や俳句をつくることをも知っておれば、立派な行儀作法をも身につけている。

(14) いたるところに清潔さと趣味の良さが見られる。

(15) 家の内部は明るく、清浄で、日々の入浴は、一般のこととなっている。

(16) すべての人的関係が愛他主義に支配され、すべての行為が義務に指示され、すべてのものが美術的に調整されているように思われる文明の国に魅惑されることを、どうして拒否できるだろうか。

(17) こんな状態の中にはいって、喜ばずにおれるだろうか。

(18) こういう人たちが「異教徒」呼ばわりされるのを聞いたら、憤然とせずにはおれるものだろうか。

(19) われわれの心内に宿る愛他精神の程度に応じて、格別こちらから無理に努めなくとも、こうした善良な人々は、われわれを幸福にしてくれるのである。

(20) このような環境からうけとる唯一の感じは、平和な幸福なのである。それは果てもなく夢の中にいる感じである。

- (21)そこでは、人々はわれわれがあんな風に挨拶をうけたいものだと思うとおりの挨拶をしてくれるし、またあんな風な話し振りで聞かせてもらいたいものだと思うとおりにしてくれる。
- (22)——その人たちは、誰もが霞のような寂光を浴びながら、完全な静寂の世界をもの音も立てずに振舞っているのである。
- (23)そうだ——いつまでもこの仙人みたいな人たちは、誰にでも軟らかな眠りの楽しみを与えてくれるのだ。
- (24)しかしこういう人たちと長くいっしょに生活をしておれば、おそかれ早かれやがては、自分の満足感の中に夢の楽しさとずいぶん共通するもののあることがわかってくるだろう。
- (25)この夢はとても忘れられまい——とても。しかしやがておしまいにはこの夢も、明るい日々の午前の日本の風景に、この世ならぬ美しさを与えるあの春霞のように晴れあがって消えてゆく。
- (26)それこそ真実、幸福感で一ぱいなのだ、もう身体ぐるみ仙境の中に——この世にはありもしないし、また決して自分のものとはなり得ない世界に——はいり込んでいるからである。
- (27)自分たちのこの世紀から——すでに過ぎた過去の広大な虚空を超えて——忘却の時代へ、すでに消滅した時代へ——たとえばエジプトかニネーヴェのような遙遠の古代へ——移送されてしまっているのである。
- (28)そのことがつまり日本の事物のもつ不思議さ、美しさ理解の鍵であり、——その事物が感動を起こす所以であり——その人たちとその振舞いが醸す妖精めいた魅力理解の鍵なのである。
- (29)幸福にめぐまれた幸福者よ！
- (30)時の流れがあなためがけて渦巻いてきたのだ！
- (31)しかし忘れてはならないのだ、それらすべてが魔法めいていることを。
- (32)——もう死者の魔術にかけられているのだということを——この光もこの色彩もまだ声音もが、おしまいには空漠と寂滅の中に溶け込んで、なくなってしまう運命だということを。

P11 ~ 15

<コメント>

東京大学教授を務めたラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の名著「Japan: An Attempt at Interpretation 1905」の全訳、「神国日本—解明への一試論」第2章「珍しさと魅力」からの引用。ラフカディオ・ハーンの目に写った、100年前の日本の心温まる日常生活が描かれている。本書では、このような「平和な幸福」が日本にどのように訪れたのかを、社会文化的な観点から欧米との比較でていねいに分析されている。本書は、東京大学や早稲田大学での講義案として執筆されたもの。ほぼ完成したが、出版の直前に54歳で逝去。日本人と日本文明をこよなく愛し、高く評価したラフカディオ・ハーンの渾身の遺産と考えます。是非、御一読ください。